

## 名誉館長館話実施報告抄

新野直吉\*

勝平 得之・武埜 三山・石井 露月・古仲 鳳洲・菅 礼之助・斎藤 由理男

### はじめに

平成17年度は、「秋田の先覚記念室」「菅江真澄資料センター」に因む、前半の講堂における館話と、後半のジョイナスにおける講話と12回行った中から、例によって前半5月13日(金)勝平得之・27日(金)武埜三山・6月10日(金)石井露月・24日(金)古仲鳳洲・7月8日(金)菅礼之助・22日(金)斎藤由理男についての館話を文章化して報告するものである。

### 勝平 得之

博物館には勝平画伯の「刈りあげ」が、志田政人氏のガラス画になって展示されていて、来館者にも馴染が深い。明治37年(1904)4月6日、秋田市鉄砲町45番地に父為吉母スエの長男徳治が誕生した。家業は紙漉と左官であった。同44年(1911)秋田市立旭南尋常小学校に入学する。

大正5年(1916)35歳で母が世を去った。6年生とはいえまだ数え年13の少年である。この頃から絵を描き出したという。生来画才があった事は当然であるが、母を失った稚い心の動きも作用したものに違いない。勿論家業の手伝いにも始めたが、秋田県立近代美術館発行の図録年譜にも、秋田市立千秋美術館発行の略年譜にも明記される。絵画だけに没入したのではなく家業にも励んだ。

6年尋常小学校卒業、市立中通尋常高等小学校に入学する。いうまでもなく高等科にである。山水や花鳥を描いた。臨画を主とするが、水墨風画の模写もある小習画帳があり、高二(高等科二年の意)・拾五歳・拾六歳などと記録されているという。8年3月卒業すると本格的に家業に従った。ただ器械製紙時代になり、塗装業が比重を増し、地元の仕事の閑季には東京や大阪など都会のビル建設の塗装にも従事するようになったという。

10年頃から当時流行の竹久夢二の「2コマ絵」

や雑誌挿絵の模写を盛んにし、その水彩画は後に初期版画の先行作品となる。13年頃から墨摺版画を試み、版木の材料は下駄屋から下駄の菌に用いる朴を求め、小刀と蝙蝠傘の骨を丸鑿状に細工した物で彫ったのである。大正の末年である15年には墨摺版画や七夕スケッチなどを「勝平庵石佛」の号で秋田魁新報に寄稿した。7月末から8月末まで7回に亘ったが、スクラップ帳には「得之作」とあるという。昭和30年に6月14日付多田等観宛書翰には「数年間ショウヘイアンセキブツ刻画としました(家が寺に近く、世事に疎い身だからとの理由という)……自ら工夫し、大発見をしたるよろこび初めて自分の生きる道を得たので勝平得之の画名をつけました」とあるが、昭和2年(1927)の独学の作品も「石仏刻」としている。

そしてこの頃のことを「明治時代の浮世絵木版画は、わたしの物言わぬ師匠であった」と昭和35年9月26日の魁新報夕刊に書いているから、彼が独自の版画家になる重要な段階であったが、こうして自画・自刻・自摺彩色版画技法を会得した上で、翌3年7月26日来秋した日本美術院の彫刻家木村五郎の、指導を受け得る好運に恵まれた。

6月30日大湯土俗生産組合自由研究所開場式があり、美術講習会の講師に招かれた「童心の彫刻家」と称された木村が26日泊った亀屋旅館に彼も同宿し、8月1日から22日まで大湯小学校を会場に催された県主催の木彫講習会に、地元の諏訪富多らと共に15人参加で、木村がサンプルに制作した女性の角巻姿の「毛布人形」、子供の冬姿の「ぼっち人形」、ケラ姿の農民の「こも人形」、「牛方人形」4種類で、地元少女や参加会員がモデルで、牛方は得之がそれを務めた。得之の制作意欲と態度は木村の共感を得ていた。

木村は、農民美術講習が社会主義的農民運動に合致するというような批判にも、「思想問題に結

\* 秋田県立博物館

びつけてはおらず、芸術至上の立場よりする指導」と応ずるところから、研究所から送附された審査作品に得之の作品が無かったことを気遣い、それは仕事が忙しいことに依ると知って安心し、翌昭和4年の4月4日付書翰でも「あなたのよき趣味を愛します」という理解と期待を示していた。木村は評価と助言の手紙で彼に深い影響を与えた。得之の作った「秋田風俗人形」は主として秋田県の物産館で販売され、昭和10年代まで彼の生計を支えたという。その木村は昭和5年冬も大湯を訪れ講習したが組合の活力は続かなかった。木村も37歳で昭和10年に世を去った。

昭和4年(1929) 26歳の1月「外濠夜景」「八橋街道」を日本創作版画協会展に初入選し、4月には平福百穂顧問の秋田美術会に参加した。7月武埜三山を介し福田豊四郎画伯に秋田風俗人形を贈る。10月「少女」が卓上社版画展に入選した。作家の地位定まったといえる。翌5年には久米晴(せい)と7月に結婚し、以後版画制作に専念し、8月下旬から9月初旬まで仙北郡農会主催の副業加工伝習会に講師となる。その9月7日賀陽宮内殿下、16日東伏見妃殿下が来県され、風俗人形の御買上げがあり、次第に広く知られるようになる。

6年(1931) 4月「雪国の村里」が第6回国画会展に初入選する。6月24日には長女郷子誕生家庭も充実する。3ヵ月かけて仕上げた通町を描いた「雪国の市場」が10月に第12回帝展初入選を遂げた。12日付魁新報は「左官屋さんが見事初入選」と報道し称えた。制作疲れと腹痛で寝ていた夜中に魁新報社の記者が入選を伝えてくれたという。帝展で先輩の版画を観たり在京の渡辺浩三画伯と友情を深めたりして「私の世界は大きく広げられたような気がした」と昭和42年7月27日秋田魁新報で回顧述懐する。渡辺画伯が岡山大学教授になる以前の戦後在秋時、秋田大学に昭和28年赴任した私は数年お附合をする機会を得たことがある。

7年6月日本版画協会会員に推挙される。数え年29歳である。10月には第13回帝展に「雪の街」が入選する。17日長男新一誕生。28日から30日にかけて県立図書館で、友人らが発起人となり、安藤和風・井上廣居らの賛助を得て「勝平得之創作版画会」が催された。前年第3回秋田美術展座談

会での福田豊四郎談として伝えられている「都会になど出ないで秋田に居って外の雑な野心をすて、本当に自由な気持で、思うままのことをやってもらいたいものだ」という姿がそこにある。

昭和10年(1935) 5月ブルーノ・タウトと識る画期的なことがあるが、既に前年2～4月パリの日本現代版画展覧会に「雪の街」「店」が出品され、国際性を身につけていた。ドイツの建築家タウトは5月24日通訳役の建築家上野伊三郎と羽越線で来秋し、駅長に贅沢でない宿をと通訳は問うたらしいが、駅長は彼らに相応しいと「一番立派な石橋旅館」に向かわせたという。これは結果的に重大なことだったと考える。

石橋旅館には勝平の版画と木版絵葉書とが廊下に掲げてあった。上野は勝平に秋田の案内を頼むことを思いつき、早速使者に手紙を持たせ遣して明朝来てくれるとの返答を得たのである。勝平は追分の近藤兵雄というこの年発刊の「草園」同人を伴い奈良磐松家を案内し、タウトは追分駅から青森に向った。私は昭和27年10月東北史学会で初めて秋田を訪れたが、こういうことは知らず、秋田蘭画を観る為に同家を訪ね磐松翁の解説を聴いた。草園は現在の「叢園」であり、得之はこの誌の10号から表紙絵を担当したのである。

タウトは翌年冬にも2月6日来秋した。得之は湯沢駅で待ったが、タウトは羽越線で来た手違いで秋田駅では父為吉・妻晴と彼の友人池田貞治駅員が出迎えた。でも得之は大曲や横手までも秋田の実際を案内し、11日の離秋を武埜三山と勝平が見送った。翌月にも藤田嗣治画伯の映画「現代日本」制作監督としての来秋にも、角館・横手方面まで撮影案内に当たる幸運に恵まれた。この時に藤田から「二科に入りなさい。私も出来る協力しましょう」とすすめられたのに、どんな条件でも帝展は去り得ないと断ったという「純情さ」を20年程後に武埜秋田市長が明かしている。その純情さこそ勝平芸術の本性なのであろう。6月には横手で個展、10月には「櫛」の文展監査展入選があった。

昭和12年10月「造花」が第1回新文展に入選し、タウトの著書『Houses and People of Japan』に手摺版画が載る。13年10月「春(ツバキ)」「夏

(ハス)」が第2回新文展入選、14年10月にも「秋(菊)」 「冬(なんてん)」が第3回同展に入選する。14年の4月には次男良治も生まれる。

15年(1940)10月紀元二千六百年奉祝美術展に「送り盆」入選。12月三男栄治誕生。16年10月銀座松坂屋で個展を開き、東宝文化映画「土に生きる」のタイトルバック11図を制作した。17年4月暫く中断の「草園」が復活彼も参加した。5月1日には、15年12月に出会っていた庄内の戸川安章から『三山雅集』摺りの依頼状が来た。文化財復元という見地からも重要なことであった。

17年(1942)求めに応じて山形県東田川郡手向村の多聞亭に2カ月滞在し、18世紀初頭宝永年間の古版木を研究して『三山雅集』100部3万枚を摺り上げた。学問に秀れた羽黒修験の呂筋が著述した出羽三山の史的解説案内書であるが、諸社堂の経歴などにも詳しい三山の古典である。7月1日完成帰秋する。この年には「椽ノ木の話」という新聞小説(富木友治作)の版画挿絵57図も描き、翌年10月「雪国の子供たち」が第6回新文展に入選する。なおこの18年には秋田放送文化協会教養委員会委員となり、年末には平鹿郡八沢木村波宇志別神社社家大友武三郎氏を訪問した。霜月神楽に関わりがあったのであろう。19年6月には鹿角郡宮川村小豆沢の「大日靈貴神社」の祭礼舞楽図八部作も協会展に出品するので、これらは大戦中における彼の作品志向を示しているかもしれない。

そして昭和20年(1945)2月12日から25日まで小豆沢に赴き12日は毛馬内町大里健治宅に泊ったが、13日には安倍神主家に泊り祭礼写生などをした。7月に彼の工房を訪ね「大日堂舞楽の図」を贈られた明石敬吉という人は、帰途秋田駅で紛失したなどということもあって終戦。その状勢変化の中でも版画葉書が売れる。11月26日魁新報社の「文化部員囑託を解く」辞令が出された。

21年終戦後の世情を表徴するような話がある。7月5日数え年43歳の彼の工房を、連合軍輸送司令部主任ハッチソン少佐が連絡将校ザーボ大尉・山口渉外室鉄道部長を伴い訪れる。東北北海道沿線視察の途中であった。数十点の作品を鑑賞嘆息した。10月第2回日展に「盆市」を出品入選する。

22年になると戦争中に版木を疎開したことや前

年蓑虫山人の作品調査に赴いたことことなどの縁で、北秋の扇田で4月8・9日「勝平得之創作版画鑑賞会」が開かれたり、5月19~21日本金三階で「旭南同級会」後援の同種の会が「草園社」主催で開かれたり、県内でも勝平版画が一層広まったが、それより早く3月27日には前年11月にも工房を訪れたという第三鉄道司令部旅客課長シャボツ少佐夫妻が再来訪した。米軍の間でも名声があがったのであろう。10月第3回日展で「大漁盆踊」が入選した。同展では、23年10月「豊年盆踊」が第4回、24年10月「堆肥運び」が第5回、25年10月「田植」が第6回、26年10月「刈りあげ」が第7回、27年10月「耕土」が第8回と連続入選したが、28年の第9回「かまくら」は落選した。

18年から取り組んだ大日堂舞楽は23年まで継続したし、24年には『米作四題』『農民風俗十二ヶ月』の制作を始めたし、25年4月には第18回日本版画協会展にも出品したし、5月にはGHQ民間教育部ハークネスが来訪激励したし、10月には東北地方民間報道課長から「県広報審議委員会委員」の委嘱を受けたし、26年5月には仙台CIE図書館長エメット・K・ケナーが工房を訪れたし、11月3日には第1回秋田市文化章を受けた。この月には、県立図書館の館報復刊1号の表紙を作り、12月には「読売ウィークリー・歌の日本地図」に「そり引き」が載り、充実した活動が続いた。

昭和27年(1952)6月サロン・ト・プランタン主催の米国・カナダの太平洋岸都市で行われた「現代日本美術展」に「鳥舞」「駒舞」を出品。8月西ドイツのケルン博物館で「勝平得之展」が開かれる。タウトとの縁で版画40点を寄贈したからであり、10月ケルン市長から感謝状が寄せられる。12月には、30年前に秋田市萬雄寺秘蔵の道元像版木を得之が発見していた縁から同寺檀徒相場信太郎(野歩)の執り為しで、禅師七百回忌に当たり勝平の手で限定30部を摺る貴重な出来事もあった。

28年10月その相場から雑誌「草園」を新生「叢園」と改め、表紙に勝平版画を用いるという書翰が14日付で届く。9月末に日展で「かまくら」が入選しなかったことへの友情の励みしだったのであろう。12月14日篠田英雄の「郷土色の強いものは中央では仲々認められにくい……しかしそれを

失えば貴方の芸術家としての特色も亦失われる」という励ましの手紙は正面からのそれである。篠田はタウトの『日本美の再発見』の記者である。29年米国オレゴン州ティラモック公立図書館で勝平得之展が開かれ、出品作品は同館収蔵となる。

昭和30年(1955)3月「かまくら」が第42回光風会展で、10月「たいまつ祭」が第11回日展で入選し、31年10月「番楽」を第12回の、32年11月「飾山雛子」を第32回の日展に委嘱出品する。

33年55歳を数え2月頃から胃を病み加療。関係諸協会も退会する。主に小品を制作。9月24日父為吉86歳で逝去。34年6月30日奈良環之助・伊藤博次・横山津恵・薄金兼次郎と県章図案選定委員となる。36年7月ロンドンビクトリア美術館の日本現代版画展に出品。37年1月17日第11回河北文化賞受賞。6月仙台市藤崎で受賞記念展開催。

38年11月3日第8回秋田県文化功労章受章。しかし年頭から体調勝れずゴッホ展への上京も断念。39年7～8月市美術館での「浮世絵美人展」に彼の製版用具も展示。翌年元秋田軍政部課長リンダール夫妻17年ぶりに工房訪問。41年には5月白根病院で胃病の手術を受け7月退院。43年『雪国の風俗』（河北新報社）刊行。44年11月高峰三枝子が工房でインタビュー。翌年御来県の皇太子御夫妻に版画集など献上。入退院をくり返し46年(1971)1月4日市立病院で逝去。墓は専念寺。

## 武埴 三山

三山の雅号で話すこととなったのは、文化人としての在り方に重点をおいたからである。明治22年(1889)南秋田郡上井河村井内屋布台で祐藏・イネの長男祐吉が誕生した。8月15日に出生とされているが、実は2月生まれ8月届出しが実際だという。母イネは飯田川村伊藤家の出である。32年上井河尋常小学校卒業、37年飯田川尋常高等小学校高等科卒業、4月県立本荘中学校入学である。2月10日に対露宣戦布告がなされ戦中であった。

県立第4中学校として開校の本荘中学校の校友会誌『白玲瓏』（大正3）に「本荘中学校論」として本人が書いている通り「由利郡一つ丈である。隣県の庄内地方から多少の入学生を見るも之は素より相手にならぬ」ということであろう、「入学

生の少ない学校」であった。それもあってか秋田県会は本荘中学分校化を決議したことがあった。父兄会は反対し文部省も申請を却下した。だから彼の論に見えるように「本荘に居ては競争者なく中学生の一人天下」の利点もあり、自らはボートの選手でもあった。

三山は少年時代に「飛鳥の巡査になりたいとねがった」（沢田伊四郎「著書の出版」『武埴三山を偲ぶ』所収）という面白い話がある。このことを『市長列伝』や『秋田人物風土記』で読んだ際には「飛鳥の巡査になる」という風であった。古代史家としては若い日に毎秋歩き廻った飛鳥の警官を武埴少年が志したとは興味深いことであった。ところが実はここは「飛鳥」で、理由は泥棒がないからだという。これは本荘中学校を卒業するに当って抱負を語ったものだという。実際には明治42年(1909)本荘中学校を卒業し早稲田大学法科に進んだ。明治19年東京専門学校として出発し35年私立学校令による早稲田大学となった。政治経済・法学・文科があり、37年商科、42年理工科が設置された。45年7月早大法学部を卒業。

後年社長になる秋田魁新報社に就職したのは大正2年(1913)で「同窓の先輩で、当時社長をしておられた井上廣居氏の推挙によるもの」（洞城利喜「記者時代の三山」『武埴三山を偲ぶ』所収）とされるが、渡部誠一郎『秋田市市長列伝』（秋田魁新報社）では大正元年11月入社3年4月退社となる。月給12円下宿料7円だった由。「新聞記者を志望して魁新報社に安藤和風を訪ねた。大正二年のこと」と『秋田の先覚』に安藤五百枝も書いている。和風は主筆で、真面目で硬直な彼を硬派（政経方面の記者）に試用したという。ところでここに面白い話がある。「魁社時代の思い出」（『武埴三山を偲ぶ』の「武埴三山随筆集」）には「当時の社長は安藤和風先生であった。何か書いたものがあるなら届けろといわれた。差当りなかったもので、学校の卒業論文を届けた。入社を許されて少し早目に出社した。見覚えのある文字の綴りが、屑籠に捨てられてた。拾って見たら、数日前届けた私の学校卒業論文であったのにはおどろいた」とある。40年以上も前のことで、主筆と社長を書き違えたのであろう。しかし「一年そこそ

こで退社した」(『秋田の先覚』)という。「富農の総領として家業を継ぐため呼び戻された」(『秋田人物風土記』)と考えられている。そうかもしれない多分そうであろう。帰郷する。

大正2年(1913)5月由利郡岩谷小学校で石川理紀之助の農事大講演会における話を聞き共鳴、翌日石川が自力更生を指導中で滞在していた仙北郡強首村九升田まで、乗馬の石川に従って7里の路を歩き従った。余りの早寝早起に耐え切れず辞去したが、翌3年の冬平鹿郡角間川町木ノ内集落指導中の石川を吹雪を衝いて訪ね、傾倒を強めて、雅号を付けて貰う。石川は小野道風の故事から「柳蛙」を与えたが、武埜はこれを用いなかった。

3年3月15日早朝仙北郡強首村を中心に大地震が起こった。当時無報酬の篤志通信をしていた深浦宗寿からの通信もあり、記者を派遣する段になって、汽車も不通なので自転車で行くことになった。自動車は少なく、仮にあったとしても道路が破損していて通れない。自転車でということになる。自転車に乗れる者も少ない。「あまり自信はないが……私ならと申し出たのは武埜さんであった」(前出・洞城利喜元部長の文)という。だが当時の魁記者は皆和服着用で、社内には安藤和風が団体旅行引率用に作った洋服が一着あるだけであった。その安藤主筆に合わせた小振りの紺サーズ背広は宮沢準治(竹翠)記者が貰い受けており、大男の武埜記者は上衣は腕半ば、ズボンは脛半ばという珍妙スタイルだったと、現地で迎えた深浦顧問は「尽きることなし」(『武埜三山を偲ぶ』)に書いている。牛島あたりから転び始め融雪路の泥だらけの到着だったが誰よりも詳しい現地踏査記事を書く。

2年8月4日以降記事に「三山」の号を用いたが、吉田東伍教授が中国で太平山と称する山を三山と呼ぶので秋田の太平山に因み命名したという。深浦は上記文中で「朝日新聞の論説記者池辺三山氏にあやかっただでもあるまいが」とも書いている。退社するのはこの後のことである。大正4年には角間川本郷家出の久良夫人と結婚、8年には長女光子が誕生している。

大正9年(1920)県農会に勤めるべく秋田に出た。農業従事者としてはインテリ過ぎたのであ

う。会長は県知事で副会長は農政通の代議士斎藤宇一郎であった。斎藤と対立していた秋田県の大脇農務課長が、由利郡内を反斎藤キャンペーンのような行動をしていた11年8月25日に、吉野由利郡長と一緒に象潟の海で水浴死する奇禍があった。武埜が深く私淑していた副会長は12年7月の農会法改正により選挙となり、その任を去った。そして9月に武埜も農会を退職し秋田魁新報社に再入社した。『秋田市長列伝』では11月に深浦らの推挙によるとなっている。政治経済部に所属し、翌年2月論説部に転じた。15年(1926)9月には、長じて秋田蘭画研究などで業績を表わす美術史家秋田大学教授となる、長男林太郎が生まれる。

昭和2年(1927)8月『単純な男』(紅玉堂)を出版する。県農会時代の写実小説とでもいうべきものである。評者は「多分に漱石の『坊ちゃん』臭のあるものだが、これはこれで面白い」(落合喜久郎)というが、傾倒する斎藤副会長は「虎」反対派の池田代議士は「獅子」はいいが、官選知事である会長輩下の課長はなんと「山ネコ」という呼名である。翌3年12月経済部長になり、4年12月には整理部長兼務となり、6年7月に魁新報の社屋が三階建て竣工し、調査部長も兼ね、論説部にも関与し社の重鎮となって行く。

折から満州事変など明治以来の富国強兵策は、軍国主義といわれるような社会を形成する。魁新報社の立場は中正だったが、8年2月整理部長専任になり、いわゆる軍帽事件に対処することになる。昭和10年(1935)6月21日川反で十七聯隊の一等軍医が酒に酔い女性のことから連れ戻す男と大格闘をし、軍帽を奪われてしまった。勿論秋田魁新報の記事になった。翌日軍は、事実無根だったという謝罪文を出せと憲兵隊を通じて要求して来た。整理部長として彼は、要求は分かったが記事の取り消しはできないと返答した。当時のことであるから今では考えられない報復行為に軍は出たのである。すなわち社長に公文書を出して、秋田魁新報社員の聯隊出入を差し止めるから「門鑑を返還せよ」と迫ったのである。

整理部長の武埜は「ひょうひょうとした感じはいかにも文の人を思わせるが、内に強烈な反骨を秘めた外柔内剛の人」(『秋田大百科事典』)と評

される人である。横暴に怒っている記者達の気持を安藤和風社長に報告し、社長も直ぐ「門鑑を返せ」という決定をした。自分達の判断では謝って来る筈の新聞社が筋を通したので、更に硬化した軍は、魁は反軍の新聞だから購読するなという印刷物を在郷軍人から市民に流したのである。

正しく営業妨害である。社はこの営業妨害を論じ軍紀の弛緩を正面から第八師団(弘前)から陸軍大臣に抗議書を提出した。穏和を好み強制や緊縮を排する秋田の社会は魁の方向を全面支持していたらしい。いうまでもなく陸軍省もまだ冷静を失っている段階ではない。抗議を認め、軍医は北海道に転勤させられ、聯隊長まで更迭された。だが軍の嫌がらせも露骨で、近くの本金デパートの屋上に機関銃を据え「反軍魁撃てッ」と空砲を射たれたと三山自身「思い出」に記す。特高警察も自由主義魁の三山のコラムは反戦思想だと「毎日のように呼び出しがきた。しかし彼は『文章は解釈しただい』と一度も呼び出しにこたえず、代わりに警察担当の記者をさし向けるという気骨の持ち主だった」(『秋田の先覚』4)と後にも評され、当の担当記者秋田放送斎藤陽二郎常務の回顧もある。

昭和11年5月『ふるさとの顔』を、沢田伊四郎社長という県出身者の出版社「龍星閣」から刊行。この年和風が没した。12年副主筆兼整理部長となる。この頃油絵を始めた。絵についても沢田社長の「著書の出版」(『武埜三山を偲ぶ』)の文中に「やさしい夫人が、戦時中にリュックサックを背負っていなかの知人をたずね、ささやかな野菜をもとめて戻ってきた。ホッとして玄関にリュックをおろすと武埜さんが出てきて、そのリュックをそのままそこへおけ、リュックの格好がいいから静物画をかいてみる、というのである。夫人はさからわれない」ということで野菜の下になっている着物のことが気になるが、次の日もその次の日もさらに次の日も、三山画伯の絵への熱意のためにそのままだったというのである。

13年5月『斎藤宇一郎と農村指導』(龍星閣)刊。湿田と乾田馬耕などと見解を異にしていた石川・斎藤両農業指導者が、共に三山の尊敬する先達であったことは興味あるところである。11月

監査役となり、破調洋画展同人となる。14年3月に取締役編集局長になり、素心会同人になった。

16年(1941)7月常務取締役就任、社のNo2となった。大東亜戦争と呼ばれた太平洋戦争の時代に入り、戦局も窮迫する20年6月に魁在職のまま郷里上井河村名誉村長になる。間もなく8月15日の終戦になり、井上廣居社長辞任と共に11月退社し帰郷した。後を担った古村精一郎社長の公職追放で、21年2月秋田魁新報社取締役社長になり、7月日本新聞協会監事となる。12月には村長を退いて、社務に励み社員の囑望も受けたのだが、今度は自身も追放令により22年(1947)11月社長を退き、後任は人見誠治社長となった。勿論この年秋田宝生会会長になったり、翌23年6月同胞援護会秋田県支部長になったり、同じ23年秋田県美術家聯盟会長になったりして、文化人の面目は不動だった。10月には『婦農半歳記』(武埜三山図書刊行会)を出版するし、24年には毎日新聞主催秋田県連合展で油絵が入賞する。

24年12月同胞援護会支部長を退く。次の動きを予知したのかもしれないが、翌25年(1950)10月追放は解除となる。直ぐ翌11月魁新報社の相談役になり、12月には秋田県公安委員になる。

名誉村長にまで推し上げ村の問題解決に利用したくせに、追放で帰村した三山を侮り圧迫さえして、所有する山林を盗伐したり、生活の足しにしようとしていた樺や松の大樹を無断伐採したり、屋敷内の大杉を切ると押しかけたり、自作地で残った5反歩の田圃に過酷の供出米を割り当てたり、更にはその田地を取り上げようとしたりした村人も、どんなショックを受けたことであろうか。

26年4月公安委員退任。23日の選挙に革新から推されて秋田市長に当選する。三山(明治22年生)社会党系で2万2876票、前市長児玉政介(同24年生)自由党系で2万1125票、加賀谷保吉(同33年生)民主党で1万5663票であった。本来社会党系でもない彼がこの形で出馬は、左派社会党参議院議員金子洋文らの説得による。武埜候補がいいと口火を切ったのは栗林三郎だったという。名案に洋文は2月半の寒い日羽後飯塚駅から党員の馬車で上井河に向かった。風邪気味だったとかの三山は仲々「うん」と言わなかった。洋文は夫人にも

強談判したらしい。武埜家の飼鳥の鶏鍋で1升酒を呑み粘った。一応拒否回答ではなかったらしく、洋文は帰りの馬櫓では酔に熟睡していた。

三山は健康に不安もあったようで、慶大出の女婿刈和野の土肥味（み）右衛門と一緒に親類で福島県須賀川住の春田良嗣医師に意見を求め、飯坂温泉に泊り出馬の決心を宿から栗林に電話した。もう3月13～4日頃であった。市長就任は4月25日である。洋文は井河での説得に「3分とかからな」かったと書いているが、記憶違いであろう。知事選挙に敗れたその夜に小畑勇二郎前県総務部長に市助役就任を求めたことも秀逸人事である。実務も議会答弁などは小畑第一助役任せで役所内のことは吏員の藤井太郎第二助役でバランスを取っていた。文章や絵や謡曲で文化人市長と謳われるが、「上にたつ者が、自分の趣味や道楽で部下にのぞむことは厳に慎むべきだ」と言っていたという（阿曾村秀一「その人間的魅力」・『武埜三山を偲ぶ』所収）。最も市長に近い工藤泰造秘書室長が「トレードマーク……私は即座に皮肉と強情をあげたい」（「偉大なる強情」・同上書）と記すのと併せると、市長は単なる行政官ではないことがわかり、三山の広い人間性もわかる。この26年には早稲田大学校友会秋田県支部長にもなる。

昭和30年（1955）4月空前の無競争で秋田市長再選。第二助役は留任で、知事になった小畑助役の後には副知事だった塩谷末吉が選ばれた。本来一高東大出の官僚であったが、宮城県から秋田県に昭和28年1月に来秋した人が第2期武埜市政を第一助役として担い、「功績は井上市長や鈴木市長のそれに匹敵すべきもの」（「市長の仕事」・同上書）と評価する。冷静にそう見たのである。

32年11月には『離村記』（龍星社）を出版、村里生活の苦汁隠忍を名叙している。日本画も始める。33年3月ラジオ東北（後の秋田放送）代表取締役社長に就任し、この年武埜三山個展（木内）を開き、自己の本性に回帰する傾向を示す。『武埜三山を偲ぶ』には渡辺萬次郎秋大大学長「密林を抜く銀木」なる文も取められるが、県民会館改築の前に、市長と学長が県の依頼の他地方の視察で宇都宮を担当した際、学長が中講堂や展示室も欲しいというと、市長は「設計が一応でき上がり、

予算がだいたい決まってからの視察や審議は、原案賛成の依頼ですよ。なまじ意見を出したからとて、平地に波立てるだけです」と殆ど取り合わなかったということである。政治とはそんなものかと多少失望した学長は「若い時代の武埜さんならどう出たろうかと疑問に思っている」と結んでいる。何となく印象に残る事実である。

そういえば三山は「私は市長になってみたいなどと一度も考えたことがなかった」と『離村記』に書き、「せり場の駒のように、馬喰達から、左右に引きずりまわされ」と自嘲のように描写している。また令嬢に対して「自分が秋田市長を二期やっているうちに、井川の家は半分カマドを返した」と語ったと『秋田市長列伝』にある。勿論三山の父祐藏は薄給記者の三山に「むすこにカマドかえされるなら悔いはない」と理由を問わず金を出した由である。

昭和34年（1959）市長を満期退任。引継ぎの際、新市長を迎える人の波を見て、自分の最初の時は誰も迎えなかったと淋しく述懐し、「去る者一人」の自分の姿を、助役を後任に押し敗れた「敗将」だからと納得もしている。7月昭和の大合併達成などの功績で市の功労者になり、11月には第四回秋田県文化功労章を報道・地方自治・文化発展等の功で受章。35年10月『市長八歳記』（龍星閣）出版。名著の評がある。39年1月には『秋田の人々』（秋田県広報課）で筆の冴を示すが本は県立中央病院で手にする。退院自宅に在る4月3日朝具合が悪くなり、夫人を「林太郎は夜遅く迄勉強しているから起こすな」と制し、間もなく意識薄れ7時55分逝去した。心臓麻痺で享年76歳。8日山王の秋田市体育館で秋田放送社葬。従四位勲四等瑞宝章追贈。墓所は楯山の満福寺である。

### 石井露月

明治6年（1873）5月17日河辺郡女米木村の37番屋布に父常吉母ケンの次男祐治誕生。これが大俳人露月のこの世に現れた最初である。明治11年には生家が女米木小学校の校舎に当てられたので、教室になった奥座敷で勉強した。体が弱く8歳まで休学だったという。14年（1881）明治天皇の御巡幸を祖父に伴われ境村で奉迎した。今風に

言えば羽後境駅の所在する地である。父は仕事があったのか、翌15年に49歳で病死することからすれば体が弱く、境村まで子供を連れて行くのが億劫だったということだったのかも知れない。

この段階で祐治は祖父から俳諧を学び取っていた。祖父与惣右衛門は「松雫」と号する俳人でもあった。いうまでもなく時代的に与惣右衛門の俳諧は江戸時代以来の発句であったと考えられるから、少年が体得したのはこの発句であった筈である。近代俳句は正岡子規に始まるのであるから、祖父やその周囲でやっていた五七五の詩型文学から学習したのはそれであろう。ここに庭訓の本質を見るのである。庭訓の語は、『庭訓往来』という江戸時代に一般化し、明治初年にも行われていた初等教科書によって広く知られる。勿論『庭訓往来』が成立したのは中世のことであるが、普及は江戸時代である。今風に言えば家庭教育・家庭訓育の意で庭訓の語は使われている。彼が祖父達の句作を習得したとすれば、それは武道などという「見取り稽古」に通じており、句作の実技が身についたものであろう。

これを大俳人になる原点として発句から近代俳句に変異進展する歩みをした訳であるが、俳句など全く作れない者の立場から勝手な言い方をすれば、彼が俳諧術を身につけたとすれば、子規に師事した後、すなわち近代俳句を専門にやるようになったとしても、子規の俳句そのものとも、あるいは碧梧桐の俳句や虚子の俳句とも、一味違うものになると考える。勿論文学は個性であるからこれが露月俳句の個性になったのも事実であろう。

18年(1885) 小学校授業生として月給50銭を受給する。湖南内藤虎次郎が秋田師範を卒業して北秋綴子小学校首席訓導になった年である。授業生というのは今の教生(教育実習生)に似ていると思う。教生には給料がないから身分上はもっと上である。それ以前、学業優秀で文部省から『論語』を賞与として受けている。天性秀れた才能の若者だったのである。受ける際は礼服で郡役所に出頭受領した。明治という時代に文部省賞を受けるのは大変な荣誉だった筈で、この後も彼の身辺に意味ある存在である平山龍蔵という恩師が、学業生活に大きな好影響を与えたが、この段階で北海道

に移住していた。国策であったのであろう。

明治20年4月秋田県尋常中学校に入学する。尋常中学とは次の段階の中学校と同じであるが、尋常中学の上の高等中学は仙台にしかなかった。やがて高等学校になる。注目に値するのは23年に既に「露月」の号を使用していたことである。しかし脚気を患い退学することになる。尋常中学中退ながら24年に田草川尋常小学校准教員となり月俸5円を受けたが、1週間で退職する。昭和10年(1935)頃19歳の准訓導の先生に担任された体験があるが、よく勉強してしっかり指導されたし、児童も若い先生だと軽んじたりはせず、親しみ尊敬していた。戦後北海道で高校教諭だった。

明治26年(1893)8月脚気に関係あるか否かはわからないが母と湯田温泉に行った。俳人になる彼にとって重要な意味を持つ出来事があった。偶然同じ宿に正岡子規も泊っていたが、知らなかったからであるが無交渉であった。しかし後にこの事実は心理的にも大きな意味を持ったものと推量する。10月文学を志した祐治の露月は上京する。

27年春に浅草区東三筋町沢医院の薬局生になる。薬剤師の勉強をしたのであろう。4月12日子規を初めて訪問し、その執り成しで小日本新聞社に入社する。神田区駿河台鈴木町に下宿して「小日本」紙の編集に関わる。同僚に佐藤紅緑がいた。

子規には彼の力量が直ぐ分ったのであろう。子規先生の口述筆記や、投稿俳句であろうがその句の添削などをさせた。実は露月は子規を訪ねる前に坪内逍遙を訪ねている。だが逍遙は「文学で成功するには第一に才能、第二に資力が必要だ」と説諭した。子規は露月を認め伸びると考えたのに対し、逍遙は若者が文学で生計を樹てることの難しさを第一に考えたのであろう。文学志望青年に対し難しくても対応し育成できると考えた子規は新しく、そういう対応をしなかった逍遙は古く規格のだったということかもしれない。逍遙も彼の真剣な文学志向は解したのであろう。要するに、祖父から受けた俳諧の技倆では、到底飯を食って行けまいと逍遙は考えて地道な生活をした方がよいと諭し、子規は新しい新時代性を加えれば新しい俳人として進んで行けると判断したのであろう。

26年7月「小日本」は廃刊になる。親会社の

「日本」新聞社に移ることになるが、その廃刊の辞を露月が書くことになる。当然子規の指図であろうから、彼の文才というものを子規が確実に評価したのであろう。というのは「小日本」には前記の佐藤紅緑（洽六）もいたのであるから、あの少年小説家よりも彼を子規が選んだことになる。日本新聞社は津軽出身の陸羯南（中田実）の経営するもので、紅緑も津軽出身であるからその縁で社員だったものと考えられる。陸羯南は著名な近代思想家である。紅緑は少し前にNHK テレビで原田芳雄演じるドラマがあった。あれはドラマチックに脚本されているが、大人になってからの我々は紅緑が相当我儘な人だという知識は持っているが、少年時代は『少年倶楽部』連載小説を純真に胸をわくわくさせて読んだものである。勿論あのドラマは紅緑ではなく子のサトー・ハチローの放埒さを妹の目で見た話の脚色が主題である。

俳句を本格的に始めた彼であるが、8月脚気で千葉県の子倉海岸に転地療養する。一人寂しくなったのか9月に「秋風や家に白髪之母います」と詠み、子規は「何とせん母瘦せたまふ秋の風」と応ずる。「います」の「い」は接頭辞（語）である。子規は旅費を貸して帰郷させる。子規は弟子思いの人だったのであろう。帰った郷里女米木は子規の眼で田舎だったのであろう。「秋田の片田舎に怪しき物あり。名づけて露月といふ」と評したというから、露月を高く評価していたことも旅費貸与に作用したのであろう。11月脚気も良くなったのであろう帰京している。

ところが28年（1895）5月17日大変なことが起こった。子規が咯血した。数年で亡くなることになる。まだここではそこまで深刻に弟子達も考えていないであろう。8月露月はまた脚気で帰郷した。今日からは何故そんなに脚気になるのかと不思議にも思えるが、過ぐる年に館話に登場した町田忠治も脚気で大学予備門から帰郷せざるを得なかった。明治38年に日本に留学した中国学生も東京は脚気が多く危険だと日記に書いた。今回も10月には帰京したが、大きな変化があった。

文学から医業に転ずることになる。子規は「初志貫徹」の説得をするが、『怪物』は考を変えない。結局師は弟子の方針を理解する。下旬に子規

は大阪や奈良に旅をする。彼の有名な「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」はこの時詠まれたという。露月の方は東京で集めた医書を携えて帰郷し、明治29年は在郷し医書を猛勉強する。日清戦争が終って日本の昂揚期である。9月に上京し10月内務省の医術開業前期試験に合格した。彼が秀才だったといえればそれまでだが、明治のこの時期には医師の検定試験もあったのである。子供の頃に「医学得業士」という先生もいたことを覚えている。

皆は句会を開いて帰郷する露月を送別した。30年5月東京医学専門学校済生学舎に入学する。明治9年（1879）越後出身の長谷川泰という蘭方系統の医学者が開いた済生学舎は私立では最も早い創立の医学校という。坪井芳洲という蘭学の医者の弟子である長谷川は、維新後官立の大学東校という医学校で明治2年少助教であった。天保13年（1842）長岡で生まれ明治45年（1912）に世を去る。31年内務省衛生局長、後代議士にもなる。露月が入学時に長谷川は済生学舎にはいなかったのであるが、その長谷川の始めた授業は蘭学的な形で、西洋医学の原書を翻訳してそれを日本語で講義するという形式であった。東大医学部を卒業、明治17年（1884）独乙に留学した森鷗外はこの講義主義を批判した。

鷗外といえれば作家として誰でも知っているが、もう一つの顔は医者で、明治45年には軍医総監になる。我々が軍隊に入った頃は総監は軍医中将であったが元は尉・佐・将などはなかった。秋田からも大正時代軍医総監になる中村緑野という人が出ていることを付け加えたい。彼は秋田にあった医学校を明治20年に卒業した後軍医になった。

入学した露月は9月に卒業する。4カ月の在学で実に早い。30年8月30日に卒業した野口英世は29年11月3日に入学し、終りの4カ月程は露月と在学期間が重なるがお互に意識したか否かはわからないし、英世にしても9カ月程の在学である。学舎は明治18年には女子の入学も許可している。有名な吉岡弥生は22年にこの学舎に入学している。

9月に卒業した彼は10月に医術開業後期試験学説に合格する。12月には初めて俳誌「ホトトギス」の選者となる。29年の『石井露月日記』によれば句作が旺んで1日何十句も詠んでいたのであるか

ら不思議もないであろう。明治30年「日本」誌上に子規は俳句評論を連載したが、その中で露月の作56句を取り上げ「碧・虚の外にありて、昨年の俳壇に異彩を放ちたる者を露月とす」と評価した。25歳の彼は俳人としての地歩を確実にした。

だが俳句を書いていただけではなかったことが『石井露月日記』でわかる。29年の日記ではマッチを5厘、煙草を2銭など買っている。煙草好きなのである。酒もよく呑んだようで、ビールは19銭5厘、正宗は15銭とあるから4合瓶であろう。

31年1月祖父と惣右衛門が逝去する。悲しんだに違いないが、4月医術開業後期試験実地合格、6月済生学舎顕微鏡実地試験を終了した。7月にはまた脚気で帰郷秋田新聞に「柿八」の筆名で執筆。子規に文通。8月に相知った能代の島田五空を訪ね2泊の上10月に上京する。そして11月末に六本木高橋二松堂医院の医員となる。32年5月には京都東山医院に勤務する。実習と考えられる。ここで彼は医師免許を得ているからである。8月医師登録。10月東山医院を辞して帰京。11月には能代を経て12日女米木の自宅に帰って来た。12月1日には父も祖父もない実家、当主の兄与八宅に開業する。33年(1900)3月五空らと子規命名の「俳星」を能代で創刊する。俳句県秋田の礎となる。

明治34年(1901)6月秋田市茶町菅原コト21歳と結婚し、子規から祝状が届く。結婚したので9月29歳で分家する。その翌年9月に師の子規が逝去する。露月は後年大正5年には女米木字宝口の曹洞宗玉龍寺で子規忌を営み、13年には自宅で二十三回忌を営んだ。敬慕の様が窺える。子規なくして大露月は生まれなかったであろう。

35年11月長男菊夫が生まれる。36年4月山林も求めて杉の植林を始める。結局2万数千本を植栽したという。この年5月17日母ケンが62歳で逝去する。湯田温泉に伴ってくれた母である。6月女米木小学校校友会会歌を作り、9月校友会文庫を創設する。故郷に定着度を強める中明治37年3月陸軍雇員として召集を受ける。第八師団補充馬廠附として3ヵ月弘前に勤務した。役人として雇員は傭人より高等である。6月日本海海戦祝捷会を催し、12月には長女ツハが生まれた。翌40年には女米木部落顧問に推される。7月碧梧桐来泊する。

明治41年戸米川村の村会議員に当選。9月女米木青年団長となり、11月次女小雪が出生。青年団長は大正12年に辞するが、それまで「恥ぢよ、働け、恐るるな」の格言を掲げ指導した。「恥ぢよ」とは廉恥を重んぜよということで、伝統の武士道精神。北海道に渡った平山先生の碑を41年12月高尾山登山口に建て、42年には青年夜学会に通年出講し地域教育に尽力。43年5月虚子が平福百穂らと来泊する。45年1月次男元次誕生。大正4年1月三男高見が生まれ10日間ぐらいで夭折する。5年6月15日三女章子が生まれる。この子は7年5月に亡くなるが、7年6月には四女七子の出生となる。

ところで大正6年3月になって、体に違和感を覚える。「二十六日 晩食前、例ノ脳充血様違和を覚エ、食事後快癒」と日記にある。どうも頭のようなようである。大正11年(1922)1月長女ツハが死去する。7月五女かよ子が生まれ慰められたと考えるが、8年中学退学、9年第二高等学校受験を目指していた長男菊夫が、ツハが亡くなる前に仙台で発病、2月に帰郷静養、12年には1月に上京入院、5月には逝去という悲しい状況が続いた。

大正14年北海道へ、翌15年佐渡に吟遊する。どちらも8月を選んでいる。この頃戸米川小学校新築問題に深く関わっていたが、それも15年末には結論を得ている。15年6月秋田市千秋公園の松風亭で銀婚祝賀俳句会が催され、俳壇の隆昌に心満ちていたものと思われる。

昭和2年(1927)3月には戸米川の在郷軍人会分会で「軍備縮小」の講話をしている。第一次大戦の後「軍縮」は世界の大勢ではあったが、在郷軍人の会で軍縮を語るのは「信念の人」であることを明確に物語っている。この年は近畿の秋を楽しんだのであろう11月に京都・大阪・吉野・伊勢などに遊び東京も訪ねたと年譜にある。五空たちも同伴したとあるが、この旅路なら当然奈良も通ったことであろう。12月には戸米川尋常高等小学校が落成し、式典に参列した。

3年5月能代で俳句大会開催、帰路土崎駅に下車し高清水に遊んだ。6月五空と抱返峡・六郷・金沢などに遊び、時々左半身の感覚異常があったという。8月には五空と藤里の粕毛峡を探訪した。

9月コト夫人は北海道に旅行し、自身も川向い種沢村に往診していたが、18日に戸米川小学校鈴木校長の転任送別会に出席。壇上で発病したという。この記録を読み、秋田大学に7年在勤の西洋史の教官が、そのあと千葉大学に転任し、何年か前に教授定年を迎え、3月下旬送別セレモニーで壇上の挨拶中に倒れたという事実を咄嗟に想起した。露月はその日午後7時に亡くなる。享年56、21日村の玉龍寺に葬られた。

(この館話のテープ起こしの文が「俳星」1023号(平成17年9月1日発行)」に載るが、細部数字や言い回しなどの出入は本文が正確。)

### 古仲鳳洲

明治11年(1878)4月10日男鹿半島の北浦野村の嶋宮伊助とタケの長男に生まれる。実はこの高僧については『『出自不明』の人四説バラバラ』(渡辺誠一郎『古仲鳳洲玄瑞』)と言われ、戸籍にも見当たらないというのである。父伊助は森岳村石井伊之助二男で明治7年1月嶋宮久太郎の養子になり、古仲タケを娶ったのだというのが事実らしいが自己申告の手続によると思われる名古屋市東区役所の戸籍では、鳳洲の生年月日は明治10年4月10日になっている。だが一番確かな筈の本人による戸籍だが、男鹿では彼の姉キヨが明治9年8月生まれなのでこれは事実と違うという。

幼名和吉から和市。一眼二瞳の子供だったので、親が心配して中山周邦住職の養子になったとされていたが、実は明治10年12月伊助は嶋宮(久太郎)家から離縁され、母のタケも翌11年9月嶋宮家から離縁されて実家の農業古仲弟七に戻り、キヨは弟七の三女、和吉を五男として和市に改名した。だが父伊助も弟七の養子になりタケと改めて結婚し、新助・忠助の2人の子を生んだ。これが、『古仲鳳洲玄瑞』が真実とする幼少時代の事情である。一眼二瞳を気にする俗世間から近所の臨済宗瑞光寺に預けられ、実子のない中山住職の養子として慈育されたということになる。智道と名付けられる。明治17年(1884)臨済宗妙心寺派今川貞山2代管長が男鹿に来て瑞光寺で大般若会を催した。この機会に智道は管長に就いて数え年7歳で得度し、鳳洲(ほうじゅう)玄瑞となった。鳳

洲は字(あぎな)玄瑞は諱(いみな)である。号は瑞松軒であった。

24年(1891)11月中山住職が入寂し、百川の宝光院から23歳の毛利雄邦が入って住持となった。養母の周邦夫人は青森に移住してしまう。若い毛利住職に十代半ばの玄瑞は馴染まなかったであろう。大久保(現潟上市)の円福寺客僧として移るが、どうも心が晴れず志が定まらなかったようで、寺を離れ出稼ぎ船に乗って樺太に向った。樺太は明治8年の「千島樺太交換條約」で露領であった。何度も「海に身を投じようと思った」と『秋田の先覚』にある。法心未だ定まらなかったであろう。青年として当然のことといえる。

26年(1893)帰郷し「死ぬ気になって」北浦で隣寺の臨済宗常在院菽庭岱洲住職に入門した。まだ16歳である。しかし外に出て修行を切に求める気持ちになったらしい。師は「徴兵検査後修行に出すから」と諭したが、若い情は如何とも為し難く、5月夜逃げの如く脱出し、勘当状態になったという。その折であろうか常在院に「誓詞の松」を植え「志常に変わず」と誓ったという。松の操を示したのであろう。師とも争った訳ではなく、白帝城のある愛知県犬山の古利瑞泉寺の教校を目指す彼に、師岱洲は瑞泉寺にいくな「僧堂」に入れと指導したが考えを変えなかったということだったのである。目的通り50里を歩いて6日目に岩手県の黒沢尻に出た後5月末に教校に入った。

だが「空腹を通り越して餓鬼道に近い……師命に背く子として親からも勘当を受け、学資供給の道の絶ゆるは当然」(講演集『瑞松硯滴』)と自ら回想する苦難の修行であった。その中で初代管長の関無学に内典(仏典)・外典(儒書など仏教以外の典籍)を学び雲水50~60人と共に托鉢三昧の修行をした。飢えだけではどうにもならず、可能な際に喰い溜めまがいのこともあったので、遂には胃病になってしまった。

雲水達が窮迫したのは、明治の維新政策では「排(廢)仏毀釈」の運動が起こり、その上社会総体が封建制廃止によって「寺祿」を失い、古寺名利も経営に困難を来たし、殊に多数の雲水が集って来る僧堂では鳳洲と同じような立場の僧侶も少なくなかったのであろう。彼は胃を病んだこと

を「仏飯祖水」を浪費した報いだと受け止めていた。稀に飽食できる機会にいわば過剰飲食したことを指しての言い方であろう。

明治31年(1898) 先年師がそれまで待てといていた徴兵検査の年となったが、胃弱の体では丙種で、明治の日本青年としてはみじめな結果であった。むしろ発奮したのか犬山から名古屋に出て臨済宗徳源寺僧堂に入り、関謙光(号は実叢)という九州出身の師の許で修行する。師は護法と護国の一致性を重んずる立場であった。鳳洲も仏教復興國風宣揚の風の中で、師が、キリスト教側から仏教は厭世教であると批判するのに対し、「仏教は厭世教に非ず」と反論するのみでなく、政治家や軍人の来訪も少なくない僧堂での修行を、深めて行った。

37年10月謙光師は示寂したので関廬山師に師事し、辛酸苦修30歳で40年に印可を与えられた。41年名古屋市東区の臨済宗禅隆寺住職となった。31歳、郷関男鹿を出でて二十数年後のことである。普通ならこの段階でも功成ったといえる。

大正前期に廬山師が秋田市の受戒会に招かれる。同道した鳳洲は男鹿に帰り、常在院の菽庭岱洲住職を訪問することになる。彼も感無量であったに違いないが、師岱洲は飲んで迎えた。男鹿の酒であろう杯を交わし、禅談義のうちに弟子の修行のことに就いて問うた。恐らく「老師かくかく苦労しかくかく成功を取めた」と、若くして膝下を飛立った鳳洲が語ってくれるものと期待していたであろう。

だがしかし、実は正確に言えば、弟子は元弟子であり、師も亦旧師なのである。しかも元弟子はもう師を超えた高僧であり、師は依然北浦の地の寺院の住職のままなのである。元の弟子は笑っているばかりで何も答えなかった。事の実情を悟った元の師は恐縮してしまう。

翌朝からは鳳洲を上座に坐らせて膳を進めたと『秋田の先覚』3は記している。彼は窮極『古仲鳳洲玄瑞』で東日本で鳳洲ほど地位の高い臨済宗の僧は出ていないと書かれるような存在になる可能性を持っている名僧である。少年時代からその非凡さは発揮されていたことであろうから、岱洲はこの事情を悟ることに長時間は要しなかったこと

であろう。恐縮したというよりは、喜んで上座に坐らせたに違いない。

大正10年(1921) 管長代理として弘法のため満州を巡錫することになった。徳川将軍が京都の大寺を初め名刹を戦国のあとに修築していたような体制はもう無く、幕府仏教から国家仏教となればよいのであるが、そうはならなかったことは既に述べた。だが明治の社会が進むにつれて仏法の側でも、興隆する重細亜の皇国日本を仏法が守り発展させるというような方向、あたかも奈良朝の「金光明四天王護国寺」が生まれて来るような方向、国家鎮護から重細亜に発展して行く日本の王法護持とでもいう方向に展開して行った。島地黙雷や井上円了などの仏教学者の思想的立場の普及も相関関係を持っていたといえる。

大正8年(1919) 5月4日の中国青年の「五・四運動」など、第一次大戦後の状況殊に日本の「対支二十一ヶ条要求」に対する反対が、排日運動に拡大してしまった世情であった。政府も宗教家達を大陸布教に渡海させる政策を樹てていた。鳳洲は仏教者として儒教や王法のことについても理解を示す立場で国策に協力する立場をとったのであろう。13年(1924)には同様にして日本領の台湾にも弘法に赴くのである。

翌14年妙心寺派の鳳洲に南禅寺派の臨済宗金剛證寺の復興の任が託され、囑託住職として赴くのである。勝峯山兜率院金剛證寺は、伊勢国と志摩国の境の朝熊(あさま)ヶ岳(朝熊山)555mに位置し、弘法大師開基説話さえ附会されている古刹である。何よりも神仏習合時代には伊勢神宮の「奥ノ院」とされていた。本地垂迹説では兜率院は56億7000万年後の未来仏である弥勒菩薩の院でもあり、密教の垂迹説などでは大日如来が内宮の本地仏とされるから、その信仰度も高く「伊勢へ詣らば朝熊をかけよ朝熊かけねば片参宮」と俚謡にも唄われ、古くからの聖地であった。

朝熊と片参宮の件は中学一年の五十嵐力博士編の国語教科書で初めて知ったが、中学を卒業した昭和18年の夏に初めて朝熊に登った。勿論昔からの道路はあったが、若者4人は直線なのでケーブルカー跡を竹の棒を杖にして頂上を目指した。ロープウェーなどではない本格的に線路の敷設され

た施設なのだが、当時の「昭南」に移設されたと  
かいう話で、跡だけがあり車は動いていなかった  
のである。登り切るとこの山は黄楊（つげ）の産  
地だと教えられた。威厳のある寺院だった。

この名刹を復興するために同じ臨済宗とはいえ  
他派から住職を嘱託されたのであるから、48歳の  
彼に対する斯界の評価興望が如何に高大だったか  
わかる。朝熊は彼の出身地男鹿と深い縁がある。  
山の麓の里には永松寺という寺院がある。ここ  
そ安東氏の秋田における最後の殿様安東実季の閉  
居させられた永松庵の後なのである。寺の裏手の  
山林中に堂々の自然石の碑が立つ墓域がある。碑  
文は経歴や身分に続いて『安部實季入道』と彫ら  
れている。寛永8年から元治2年まで28年間も閉  
居のうえ84歳の長寿であった。悲憤はそれだけ長  
かったわけである。朝熊に登る前には安東氏のこ  
となどは全く知らなかった。妙な文字合わせだが、  
金剛證寺に赴任した鳳洲の年齢は実季入道の享年  
とは数字が逆並びだった訳である。

昭和2年(1927)4月臨済宗大学の学長に就任  
する。今の花園大学である。大学行政とは余り関  
係がないようなこれまでであったのに、極めて適  
切な時代に合する判断をした。コンクリート4階  
建ての大学図書館を新築したのである。しかも翌  
3年の新学期である4月17日には、関廬山老師の  
求めで徳源寺住職になったのであるから、実に短  
い在任であったのに、大学の学術研究にとって不  
可欠な重要施設を整えたのは達見である。

住持となった蓬萊山徳源寺は東区新出来1丁目  
にあるが、初めは織田信雄が熱田に創建したもの  
だという。僧堂の師家として彼は雲水に厳格な指  
導をする。「カミソリの刃」と言われた由だが、  
慕う僧侶は多く、常に100人を下らない弟子が参  
集した。「中には、厳しさに恐れをなして逃げ帰  
る者も少なくなかった」(『秋田県名僧列伝』)と  
書く笹尾哲雄「徳源寺鳳洲禪師伝」には「昭和十  
一年、鳳洲は、秋田維摩会の屈請に応じて来秋し  
秋田市の大悲寺で接心会を開く。そして遷化する  
まで毎年、必ず来秋」会員指導をしたこと、「酒  
が大好きで秋田に来ると毎日のように大悲寺の本  
堂で秋田の銘酒を飲んでいた」ことを記している。

維摩会(え)とは、富豪の在家信者維摩居士

(詰)が「空」の精神を悟るに至るを説く經典で  
ある『維摩経』を、講義する法会である。興福寺  
で10月10日から16日まで7日間行われた勅願の法  
会を元に寺院で行われた。そもそも藤原鎌足が山  
科陶原の自分の邸を寺として講じたことに始まる  
と伝える。10月16日は鎌足の忌日である。接心会  
(え)は心を統一する法会の意で撰心会とも書き、  
具体的にいえば坐禅会である。

この間昭和13年(1938)飯塚の小玉友吉翁の帰  
依により太平山開得寺の開山となった。友吉は小  
玉合資の開祖であるが、敬神崇仏の念篤く、八郎  
潟畔70町歩を開墾したり羽後飯塚駅を造ったりし  
た。明治6年に生まれ昭和25年世を去った。鳳洲  
については『秋田の先覚』3では「昭和十二年、  
九月多くの支持を得て、京都大本山妙心寺の管長  
となった」とある。『古仲鳳洲玄瑞』略年表では  
昭和17年6月22日「臨済宗妙心寺派の第十五代管  
長(貫主、妙心寺六一〇世)に就任。65歳」とあ  
り、「徳源寺鳳洲禪師伝」にも「妙心寺派の管長  
(当時は貫主)になったのは、昭和十七年六月の  
こと」とあるので、17年(1942)が正しいと認め  
られるが、妙心寺派最高の地位に就いたこのこと  
は、「本県出身で禅宗の管長になったのは鳳洲が  
最初である」と上の禪師伝にある。

学長と同様、長くは地位に居らなかった。昭和  
20年(1945)5月に名古屋の徳源寺が2回目の空  
襲罹災で僧堂の大半が消失し、復興の為に10月2  
日管長辞任し名古屋に帰任したからである。

戦後の名刹復興の苦労は推察に難くない。若く  
して胃を病んだ名僧は、入院加療を要すること  
になった。小康を得て帰り蓬萊山長養室に静養中  
昭和22年(1947)1月21日午前3時45分葡萄酒を味  
わい70歳で入寂する。19日社用で上京の小玉合名  
の小玉確治代表社員が浦和の長女宅に泊っていたら、  
飯塚の開得寺檀家総代から「老師危篤名古屋  
行き頼む」の電報が深夜届き、翌朝葡萄酒1本と  
鶏卵7個を用意東京から戦後混雑の列車で夜中名  
古屋に着き、追剥の出る夜の街を辛苦の徳源寺訪  
問を遂げ、昏睡状態の禪師を見舞ったら、不思議  
や意識回復し、秋田から小玉が恩賜の葡萄酒と卵  
を持ってきたので「召し上がりますか」と呼びか  
け、葡萄酒入手困難時の大好物葡萄酒を3回も飲

んで瞑目した（『古仲鳳洲玄瑞』）という。そしてこの恩賜の葡萄酒は、たまたま東京で19日町田忠治邸で貰った品であったという。となれば、町田が前年11月12日逝去後70日の話になる。

## 菅 礼之助

明治16年(1883) 本籍地雄勝郡川井村岳ノ下で生まれたと書類上でもされているが、実は南秋田郡土崎港町で11月25日に父礼治母ユウの長男として誕生する。父は明治11年(1878) 士族の「金禄公債」の浪費を防ぐ為に第四十八国立銀行を創設し、戸村義得を頭取とし自分は支配人を務め、13年には秋田商法会議所を創立し自ら会頭になるなど、秋田の産業振興の縁の下の力持的な働きをしていた。その力の源由となったのは祖父運吉の卓越した存在であった。まずその段階から見よう。

文化14年(1817) 川井村岳ノ下山根に菅太右衛門の子として祖父運吉は生まれた。川井は役内・中村の2村と共に明治22年に秋ノ宮村になり、後には「秋の宮」という平仮名書きになっている。東は今の108号国道筋になる鬼首峠になり、南は天正14年(1586) に合戦のあった有屋峠になる。役内川上流の山間ではあるが、大役内・役内・薄久内3支流合流域になる。陸奥とも出羽の最上地方とも通路を持っていた。川井は河井とも書かれるが役内もまた八口内とも書かれる。菅家は地域の有力者であった。小野寺家臣にも菅氏はいた。運吉は10代目太右衛門で、姉おゑしとその躰蔵松が9代目に当たるが、その娘おさとと躰勇治の夫婦は10代目に当たるが別家になったという。

19世紀初頭享和の頃に躰入りした8代目太右衛門の仁兵衛は農業の他に大工職で業績を挙げ、仙北郡の田沢村重蔵と組んで、柚出しの山師商売を営み、佐竹家氏神大八幡社殿再建の御用材も上納し、御用中帯刀も許され、藩の御木屋御用山師になった。天保初年役内・川井両村纏肝入に任ぜられ、同4年(1833) 17歳になった運吉と親子で肝入を勤めるように命じられた。凶作の減租を訴え克ち取った。村役として一層責任感を持ったのであろう。8年にも減租を獲得した。

山林資産の移出を建白し採択される。そのうえ五人扶持の士分取り立ての提示を受けた。通常喜

ぶ筈であるが彼は受けなかった。幕末になり侍の将来性に希望を持てなかったのか、五人扶持などの軽輩では不満だったのかだったのであろう。

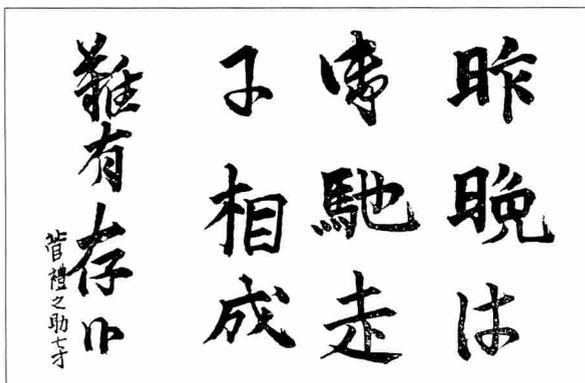
評価を受けた藩から木材商として藩御用達の指定を受けて江戸に出る。下級侍よりも御用商人の方が、自由に働き成果を挙げ得ると考えたのであろう。深川佐久間町・浅草平右衛門町に木材店を開き、秋田屋仁左衛門と名乗り名(苗) 字帯刀を許される大商人になった。その豪勢さは「幕末の紀文」と称されたと伝える。徳川御三家の木材御用達も務めた。いうまでもなく祖父運吉が栄華の段階では『幕末』は意識されるべくもないから、この称は明治の初めに誰か附けたものであろう。

天保12年(1848) 父礼治が2月17日に川井で誕生した。長じて江戸深川の店を祖父運吉から任された。運吉は32歳で江戸に出たという（『秋田の先覚』1）から嘉永元年(1848) の出府であろう。礼治はまだ数え年8歳であるから故郷に居住していたものであろう。運吉には妾がいたと高山暹治作成の菅家の系図にあるから江戸での身のまわりに不自由はなかったのであろう。江戸に出るや大火があり巨万の富を木材で得、安政2年(1855) の大地震や同6年の江戸城本丸、文久3年(1863) の同本丸・二ノ丸・三ノ丸焼失などとも絡み秋田屋の木材は、幕府や御三家、いうまでもなく佐竹家に重宝がられ、巨商になったのであろう。

明治4年(1871) 廃藩の際運吉は江戸を離れ能代に住み酒造や畠作をしたが失敗、土崎に住み維新期の「通商司」を経て、能代の木材業・土崎の回漕業を営んだ。地元が受けた菅家からの刺戟と恩恵は大きかった。運吉は10年に世を去ったが、礼治は前記のように士族が「金禄公債」を浪費するのを防ぐべく「第四十八国立銀行」を設立して、商法会議所会頭になった13年、同僚の県議会議員日景弁吉の甥鳥潟恒吉に、17歳の妹サエを嫁がせた。恒吉は大分で病院を経営していたが、花岡の兄平治の長男右一を引き取り、サエは右一たちの教育に鋭意力を注いだ。江戸から東京での生活経験の豊かな礼治は繁く秋田と東京の間を往き来し、秋田の産業進展に尽くし「秋田の洪沢」といわれたという。洪沢とは洪沢栄一のことである。当然反発や嫉妬も生じた。

栄一は武蔵国の藍玉豪農出身の攘夷論者であった。幕末に富農層青年が目指すことの多かったように、士分を求めてのことか御三卿一橋慶喜の家臣になる。パリの万国博に日本が初参加したことはよく知られているが、代表の徳川昭武（慶喜の弟）の随員になった。慶喜は水戸家の七郎麿で七男、昭武は藩主になるが余八麿で十八男、共に父は水戸斉昭である。この背景の中で栄一は維新後政府の官員になり、大蔵大丞となり大輔井上馨を補けた。明治6年(1873)に西郷派などと意見が分かれ井上と共に下野。井上は2年ほどで官界に戻るが、渋沢は第一国立銀行・王子製紙・東京瓦斯・大阪紡績などを設立し実業界第一級の存在となった。擬せられる礼治の活躍は素晴らしいことと認識されていたのだ。

14年明治天皇東北巡幸に当っては、土崎酒田町の菅邸が9月13・14日行在所となった。彼は名誉にこたえるべく豪華な建築を行った。後には名所となった。もちろん初めて金持になった家でもないので軽薄な成り上りの造作ではなかったであろう。彼は「礼治、書画骨董遊芸狂歌に通じ礼節あり」と評されている人物だからである。桐柁構造当時の貨幣価値で7,750円の建築費だった。



『菅禮之助』河野幸之助著（日本時報社）口絵より

明治16年(1883)11月25日礼治の長男として礼之助が誕生した。23年土崎尋常小学校に入学する。父礼治は秋田銀行を設立する。8歳で入学するとしてまだ7歳で「昨夜は御馳走に相成難有存候・菅禮之助七才」と立派に筆で書いた習字であろうと思われる書がある。尋常科は40人の級で1番は女子だったが、高等科に12～3人が進みと女の子は5～6番になった。そして礼之助は29年(1896)高等科を1番で卒業し、4月秋田中学校に進学する。

往復4里の道を通学し数学好きで猛勉強をした。

幼少時母ユウは「よその子と違う。お父さんは直ぐ50歳になる。グズグズしてはおられないよ」といって訓育したという。(河野幸之助『現代人物史伝菅禮之助』日本時報社) 実際は父が43歳の時に生まれているので、小学校入学の前にこういわれたのであろう。仕事で不在がちの父と入浴したり食事を一緒にする時には珍しいので喜んだという。中学生くらいになってからであろうが、父は福沢の本を彼に読ませたという。彼を実業家に育てるために福沢論吉精神を学ばせたかったのであろう。先の系図には「礼治の妻は江戸の生まれで貞女といわれるが、子供がなくそのため妻のすすめで礼治に妾を抱えさせ、子供三人をもうける」とあるが、その妻がユウなのであろうか。

礼治の明治5年(1872)の官林袖入に関し、『能代木材産業史』は山崎貞一郎上申書などを資料として、父運吉の特権獲得が「林政の弛緩がみられる中で、山林担当官の恣意的運営が」背後にあると指摘し「菅の県官へのくい込み方の強力さ」を批判している。江戸で身についた菅家の経営は、後にも触れるように、自身が20代と30代に大阪と東京で県外の経営を体験した安藤和風などは評価するのであるが、在来の慣習的袖出し事業と大きな差異を持っていたものと理解される。

31年(1818)6月級友に下された学校の処分の撤回を杉谷佐五郎校長に直談判で求め、ストライキにまで至った。スト不参加生徒を強硬派生徒が殴打する事件まで起こり、10人ばかり退学になる。約半数は上京し、彼も杉浦重剛校長の日本中学に4学年への飛級転校を目指したが果たし得なかった。土崎が大火になったので一家は挙げて東京市麹町区飯田町5丁目13番地に移住する。『土崎港町史』大火記録に、31年6月18日205戸(棟)と秋田・四十八両銀行支店や寺院などを焼いたという記述があるので、それであろう。礼治は秋津・卯根倉などの鉱山開発と、木材業・銀行経営等に努めて行く。

32年4月商工中学5年に編入され礼之助の飛級は実現した。33年3月商工中学を1番で卒業し、一高-東大-政治家の進路を希望したが、父礼治の「あんなくだらないものになるな」という意見

で、東京高等商業学校を受験して9月から通学し、福田徳三教授に惹かれていたが、10月病床に就いた。肋膜炎で看病の為に母も上京し一家は完全移住の形になる。翌34年春に九州旅行を体験し10月復学する。完全東京移住の契機に土崎大火のあることは先に述べたが、この「館話」の直後注目すべき情報が、工藤市五郎（曾祖父）－市太郎（祖父）が土崎菅家の大番頭であったという工藤宣一氏によって齎されたのである。

火災は二度あり、一度は工藤家の土蔵が不審火視される形の火元となった。その為に、工藤家は土崎港町の外に退き住んだという。菅家は県南産米の販売も手懸けていたが、土崎まで川下しをすると水に濡れる禍があるので、角間川に店舗を構えそこで等級を定め売買したというのである。こういう水の災いが「秋田腐米」と因果関係のある事柄の一つなのではないかとも思うに至ったのであり、そして官山柚入問題などとの関わりで指摘した菅家の江戸東京仕込みへの反発や嫉妬などの存在も、名所になっていた豪華な行在所を烏有に帰す一因になるようなことも、有り得なくはないかもしれないと思うにも至った。

35年(1902)秋には学友岩下家一の誘いでポート部に入った。もちろん1年学年は遅れたが、病休もなく遅れた内田信也（後年鉄道大臣・農林大臣・宮城県知事など歴任）などは彼のそれと較べて「自分は立派な落第だ」と威張るような、留年など問題にもしない周囲の雰囲気だった。36年になると家運は挽回傾向を見せる。彼は校風改革の念を「一橋会雑誌」などに発表する。参禅も体験するが、37年2月対露宣戦があると「対露の歌」を作詞し、大提灯行列計画に参加する。直前に松崎校長から中止命令が出され頓挫し、福田教授も学生に同調する立場だとして休職処分を受け、学生の彼等は夏休中も校長対抗策を議していたが、東大系とされた松崎校長は10月11日に本科3年を放校処分としてしまう。彼は神田錦町の法学院に通った。38年2月17日復校が許可されて、7月には東京高等商業学校の卒業証書を得た。

日本銀行に就職しようとしたが父が許さず、隣家に住み彼に理解を示していた古河鉱業庶務課長の昆田文次郎の存在によって、古河合名会社に入

社し庶務課に勤務した。程なく高商先輩である男爵中島久万吉課長が入社して来た。秋には長瀬サキ子17歳と結婚することになる。秋田高女の出身であった。39年夏24歳で天津に駐在し銅を売込む任務が与えられた。非凡さを上司も認めたのであろう。上海・南京・漢口にも赴き、中国についての体験を深めることになり40年秋に帰国する。

明治42年(1909)大阪支店に副支店長として勤務し、相当発展的生活もしたようであるが、転じて43年秋まで門司支店長を正確に務めた。存在感を高めているうちに45年3月27日父礼治が上野桜木町の寓居で逝去する。73歳で墓は秋ノ宮の岳ノ下にある。この年5月25日長男礼太が誕生する。

大正3年(1914)11月課長に昇任。5年春馴染深い大阪の支店長に赴任。6年には遂に古河商事株式会社取締役役に就任する。しかし10月に彼を評価していた近藤陸三郎理事長が死去するという出来事があり、少なからぬ影響があったと思われる。9年(1920)夏には、担当者に見込違いの大損失があつて難局を迎えた豆粕取引問題を処理する為に大連に派遣された。馬賊の棟梁が助力を申出たといわれるから、彼の往年の中国通の立場が役立ったのであろう。任務は達成したが古河商事の会社は消滅し、彼は本社の理事に就任する。

大正12年(1923)関東大震災の後の帝都復興について、大震災善後会副会長・帝都復興審議会委員であった子爵渋沢栄一84歳は、災害に強い新しい帝都を造ろうと考え、姻戚の中島久万吉に実務を託すべく実質的善後会長として協力を求めた。中島は有能な腹心菅を伴うことを条件とし、渋沢はそれを快諾したが、2人を手放すことを嫌った古河の社長古河虎之助は昆田を伴い渋沢の許に赴きそれを拒否した。従って菅礼之助の敏腕が近代的帝都建設に発揮される機会は失われたのである。

第一次大戦後の恐慌で低迷感のあった古河も昭和6年9月18日勃発する満州事変によって重化学工業部門で転機を迎えようとする直前、昭和6年(1931)8月彼は古河を退社する。既に前年に頭を5厘刈りにしていたというから、何らかの理由で心境の変化があつたのかもしれない。

在職足掛け27年の退職金13万円は相当な額であるが、大相撲の愛好後援者であった彼は秋田出身

の能代潟などにも目をかけていたが、大横綱常陸山の弟市毛五郎の支那料理屋の資金借用窮迫の肩代りに大枚8万円を放出してしまった。

サキ子夫人は旅に出ることをすすめ、工学博士山田復之助と靖国丸で世界一周に出た。勿論5万円の軍資金はまだ残っていたのである。8年11月26日の出発だった。ところがこの外遊が実業界との訣別とはならなかった。やがて次々と会社役員の任がやって来るのである。戦時下であるという影響もあったのであろう。長男礼太は10年12月満州国境に近い北鮮の会寧の部隊に入営した。日支事件の勃発した12年(1937)7月には満州に移動している。戦時の景気が動く中で14年帝国鉱業開発株式会社の社長に先ず就任、全国鉱山会会長になった。もはや古河からの13万円消費など物の数でもない。やがて出征などで遅れていたのであろう礼太の結婚がある。

16年母サキ子夫人は秋田高等女学校あげまき会の在京同窓会で後輩の吉武禎子を1月に見た。正確には見初めたのである。3月中旬には日比谷大神宮で礼太・禎子の婚礼があって、中島久万吉男爵も出席した。なお次男達吉も東大法科出で、三男元彦はこの16年に東京商科大学を卒業している。次は岡野元男爵に嫁す長女栄子であり、末の四男順一も昭和21年に商大出身である。なお一橋大学に改称されるのは昭和24年のことである。

ところで長男に意中の嫁を得たサキ子夫人は、17年11月24日にまだ54歳で世を去る。37年間生活を共にした妻との別れを悲しむ間もないように、18年には藤田組から名を改めた同和鉱業株式会社社長に就任した。空襲下家は戦災に遭ったが家族は無事で終戦を迎える。帝国鉱業開発の社長を免ぜられ一息入れる筈のところ、21年(1946)石炭庁長官という戦後の要職に就任させられることになる。さらに翌22年には配炭公団総裁というやはり時局下難しい任務に就き、日本産業協議会評議員会議長や経団連顧問になった。顕職にあった者が戦後味った苦渋である追放をここで受けた。

勿論不本意であったろうが、他の人と趣の異なるころがあった。彼は俳号「裸馬」という俳人だったのである。昭和6年段階で俳人である安藤和風は「東都実業界に於ける中心人物である余技俳

句を好みて裸馬と号し、大阪青木月斗氏の『同人』のパトロンたること祖父運吉の国彦に於けるが如くである。異父兄大陽寺蝶児氏も筆者等と共に俳人たること人の知る処である」(『秋田の土と人人の巻』)と評している。そこで「同人」誌を主宰し俳業に励む。余技を超えていたのであろう。

ここで和風が国彦の名を記しているのは、幕末の久保田藩士酒井甚五右衛門のことで、国彦はその俳号である。軽輩の頃吟味役への親戚から斡旋の申入を受けた際、希望はするが「附届の資がないから諦める」というのを聞いた運吉が、その資を援助し志望を達成させた。酒井は累進して勘定奉行になり大阪に往来して俳諧の技も高めたという。その事実に言及して、彼の「同人」援助も祖父のそれと同じだという判断を述べている訳である。和風の菅家評価は高く、『能代木材産業史』のそれとは対蹠的である。だが、礼之助は単なるパトロンではなく名主宰者でもあったのだから、充分楽しんだことであろう。異父兄というのは礼之助の生母が礼治と結ばれる以前に生んだ人であろうが、四男順一が大陽寺を名乗っているのはその家を継いだのであろうか。

追放解除の後にはまた繁忙になる。昭和29年4月東京電力株式会社社長・電気事業連合会会長に就任し、31年には日本原子力産業会議会長という最先端の日本産業界をリードする頂点的役職にも就くのである。以後電気事業連合会会長・経団連評議員会議長も歴任する。昭和39年(1964)11月勲二等瑞宝章の叙授を以て国もこれに報いるのである。

昭和45年(1970)11月7日には珍しい生存者再叙勲の勲章昇叙があって、勲一等瑞宝章が授けられることとなった。ところが彼は式に出なかったのである。目が不自由で「天子様の御前で若し粗相でもあったら」という考えからで、子が科学技術庁に代理出頭した。46年版の『秋田魁年鑑』(昭和45年10月10日発行)によると、東北電力・同和工業・八戸製錬・小名浜製錬各相談役、日本電子力産業会議会長、常磐共同火力会長、アラビア石油取締役、東京瓦斯監査役、一橋大学後援会理事長、日本鉱業振興会会長、日本相撲協会相撲運営審議会会長という役職名が列挙されている。同和工業は「同和鉱業」の、日本電子力産業は

「原子力」のミスプリントと考えられるが、何れにしても多く重い肩書である。そして住所は杉並区であるが本籍はなお雄勝町となっている。勲一等の勲章親受式に出なかったくらいであるから既に体力の限界を自覚していたのか、翌昭和46年(1971)2月18日逝去する。88歳米寿を数えた。秋田出身実業家の偉大な一生である。

平成17年11月10日工藤夫妻の愛車に便乗して岳ノ下を訪ねた。ダケの下ではなくタケの下で、菅英夫氏のガイドも受け、立冬から4日の昼の陽を受け整然と同形の碑が並ぶ菅家の墓地の前に立ち、工藤写手のカメラのシャッター音を聞いた。「菅家之墓」という石碑と彼ら夫妻の墓碑は現代風花崗岩正方柱形であった。もちろんそれとは石質も異なり近代式の父母と祖父母の墓碑も先祖のそれもすべて丸肩の同型で列を成し立派であったが、「雪に埋もれてならべる墓や父と母 裸馬」の句に表徴されるように孤愁感があった。



岳ノ下の夫妻の墓碑

菅ガイドに導かれた中山小学校跡地脇の聖地に、この句碑は彼の胸像と並んで堂々と建っていた。だが俳句は、その前に立ってじっと見詰めていると、父母だけでなく自分のそれも同様だろうと見通している概があった。この地点は菅江真澄の『雪の出羽路』にも登場する。「唐櫃石」とい

う薄い蓋もある名工の作みたいで宝が入っていると伝える旨記す。『勝地臨毫』『雄勝郡五』に絵もあるが、絵に描かれる杉と松の木々も現存し、雄勝で盛んであった養蚕に関わり火災に罹つ蚕を供養する大正9年の石塔もあった。

像を見上げていると、工藤氏から聞いた「運吉が用意した良材を佐竹氏が下賀茂神社に寄進し、返礼として『佐竹本三十六歌仙』が贈られたのだ」という話が脳裡に浮かんだ。それ程の事業能力を持った祖父の布いて父も通った路線を、俳句と共に歩んだ大事業家は、スケールの大きさから、雄勝にも秋田にも納まり切らない存在だったのであろうか、と不図思った。



中山の胸像と句碑

#### 斎藤 由理男

明治35年(1902)6月13日卯三郎・ツヤの三男として由利郡上郷村本郷に生まれる。上郷は象潟町になり今はにかほ市になっている。由利郡一の男児になれと由理男と命名されたという。42年上郷尋常高等小学校に入学し高等科2年卒業後、象潟小学校高等科3年に進学する。高等科は中心的な学校では3年があった。

大正7年(1918)秋田県師範学校本科一部入学。特に体操で優秀だったわけではなかったというが、篤実に習練していた。11年に卒業し北秋田郡前田尋常高等小学校訓導として赴任、ここでも体操に励んだ。間もなく8月短期現役兵として弘前歩兵第五十二聯隊に入隊し、9月に伍長として除隊になった。彼の体操熱心が評価されたのであろう、大館の大和田楳之助校長が自分の学校に勧誘したが断った。

12年8月文部省教員検定試験(中等学校体育科)合格。13年(1924)4月大和田校長の熱意により大館町立男子尋常高等小学校訓導となる。次第に青年たちの体育指導にも当たるようになる。

14年(1925)6月、母校秋田県師範学校和田喜八郎校長の求めにより師範学校教諭兼訓導となる。秋田のキリスト教教会で行われたデンマーク研究者平林廣人の「デンマークの夕べ」という講演を聴き、デンマーク体操が自身の体操観と合うと考えることになる。この長野県松本中学校卒業の教育者は、英語で卒業の論文を書いたという西洋好きで、教会に赴き宣教師の処で農業大国デンマークのことを知り、関心を深めたのだという。

教師になった平林は小学校長になったが、「大供教育」を目指すようになった。後藤新平の援助を受け、東京に出て震災後に「町会」を結成する社会生活運動やボーイスカウト運動を行う。ボーイスカウトでは後藤会長の秘書になり活躍する。イギリスのジャンボリーに赴き、デンマークの35mm映画を撮って帰った。斎藤由理男の聞いた講演にも写実性が溢れていたに違いない。

昭和2年(1927)4月に斎藤は上京し、西田哲学を修めた教育者小原国芳の成城学園に勤務したいと、和田師範学校長に訴えた。秀れた校長の和田校長は励まし辞職を認めた。彼は秋田を離れて特徴的な教育をしている成城学園で教鞭を執ることになったが、4年4月に、小原が新たに武蔵野に広大な玉川学園を創立して真・善・美・聖・健・経の全人教育を展開することになると、斎藤も玉川学園に移った。

東京の体操界では秋田師範の先輩の東京帝大司書小野源蔵が新体育理論を提唱していたが、彼の体操の恩師である三橋喜久雄などと共に極めて積極的に、彼の立場を理解し支持した。当然、平林の講演を聞いて以来持っていた、「デンマークでは体操を人間形成や社会生活の基礎において、広く国民の日常生活の中に溶け込ませている。それを自分の目で確かめてみたい」という趣旨の彼の考えを支持した。さらに小原国芳学園長も玉川学園の為になるならとデンマークに留学することを認めたのである。昭和4年(1926)6月デンマーク国オレロップ体操高等学校に入学する。この留

学した学校の校長がニルス・ブックなのである。

県人でこの留学に先行する人が、スウェーデン体操の井口阿くりである。明治3年(1870)学者の久保田藩士井口礼の子供として生まれ、東京高等師範学校女子部を卒業し、渡米してボストン体操師範学校等に学び、欧州を視察して帰国した。瑞典人リンク発案の解剖学・生理学に基礎を置く均斉ある運動がスウェーデン体操である。それに対して柔軟性・巧緻性・強壯性を高めるのが斎藤のデンマーク体操である。

昭和5年(1930)6月24日文部省から各国体操事情調査を委嘱され、斎藤はそれを受けて伯林体育大学研究所、瑞典王室中央体育研究所、塊太利シュナイダースキー学校などを調査した。体操とスキーとの研究をした訳である。帰国は翌6年3月オレロック校を卒業してであった。

帰国した彼の成長を小原国芳は評価し、ニルスブックの体操チームの日本招聘を企図する。この年の夏十数名(『象潟町史』では26人とある)の体操チームの来日が実現した。国内40カ所での講演会や体操の実演会を行った。彼は留学先での師の来日に大喜びして企画調整から案内・通訳に大活躍した。玉川学園は9月にニルス・ブック体操高等学校東洋分校を開設し、学園教授斎藤由理男をその分校主事に任じた。彼の活躍は一層顕著になる。

昭和8年(1933)10月には東京女子経済専門学校の講師を兼ねる。9年8月13日東京市日本橋区小舟町1丁目2番地岩田金之助・ひさ次女八重子と結婚家庭を持った。翌10年2月20日長男健が誕生した。なお、次男宏は13年1月1日の、三男誠は16年10月3日の誕生である。健の生まれた10年の10月には出版社東京堂の教習所講師を兼任する。

11年(1936)には5月に女子学習院講師を兼任する。この時代の学習院の先生は最高の貴族社会の教師である。元旦に次男の生まれた13年の4月には日本大学教授を兼任する。柔軟性・巧緻性・強壯性を高める彼の体操の名声は愈々高まったのである。14年1月には鉄道省嘱託になる。有名な「国鉄体操」の生み出しとなるのである。当時「紀元は二千六百年」と謳われた昭和15年(1940)1月20日には、帝国海軍までが彼の体操に求める

ものがあつたのである。海軍砲術学校体操教師嘱託を兼ねることになる。

平成13年(2001)7月14日斎藤由理男の命日に当たるこの日、秋田県立博物館の講堂では玉川学園史料室の岩渕文人元室長による講演「デンマーク体操と斎藤由理男」なる講演が開催されていた。元室長は平林廣人の娘で玉川学園で体操を習っていた女性の子息である。6月から児玉知行学芸主事担当の「斎藤由理男－デンマーク体操普及にかけた生涯－」の企画展が行われたおり、その一環行事であった。

その講演の中では海軍の落下傘部隊の隊長などに、海軍体操の目標として、1 整った身体、2 強い身体、3 とても器用な身体、4 疲労の回復ができる身体、5 病気にならない身体という目標を掲げて身体を鍛えておかなければならないと論じていると述べている。この15年4月29日には「支那事変従軍記章」を授与されたのである。海軍への体操指導を戦陣に出たと同質に位置づけられたのであろう。

昭和16年(1941)11月東京府立青年学校教員養成所嘱託となる。後の青年師範学校である。間もなく当時の呼称で「大東亜戦争」が始まり、17年2月千葉医科大学嘱託となり官立大学の教師となった。4月には満州鉄道東京支社嘱託、6月には遂に東京帝国大学嘱託となり、7月興亜工業大学教授兼任、12月東京帝国大学熱帯農業員養成所嘱託、18年(1943)3月社団法人映画配給社総務局人事部厚生課嘱託、4月千代田女子専門学校講師兼任と人事の事項が続き、如何に彼が世に迎えられていたかを物語る。

前出の岩渕講演に於いては、18年7月1日から8日まで毎夜勤労者体操講習会があり、そこで述べた「言葉」として講演者は、1 信念、2 見識、3 生命と使命の一致、4 気概、5 愛情、6 情熱、7 感謝、8 徳行、9 敬虔の念、10 健康大切に、11 技術錬磨と要略できる内容を教えたこととメモによって話している。これは信念や見識が先ず出て来て技術錬磨で結ぶということで、並の体操の先生ではない教育哲学を持っていたことを示している。

昭和19年(1944)1月日本製鉄株式会社総務局嘱託兼任、4月日本女子大学講師兼任、8月財団

法人大日本体育会農民体育連絡委員を委嘱され兼任と続く。こんなに多方面の職務を達成するのは体が持つまいと案ぜられるが、これが有能人の戦時下生活だったのであろうし、農民体育の仕事などは故郷の由利のことを念いつつ引き受けたのかもしれない。

昭和20年(1945)妻と子を郷里に疎開させるべく帰郷した直後の7月13日、当時の交通事情とて2時間遅れで夜10時に青森駅に着き、青函連絡船の栈橋に向かった。国鉄体操指導のために北海道に赴いたのである。船中では本を読んだり、原稿を書いたりしていたが、秋田に立寄って友人から贈られた酒の入った水筒を傍に置いていた。

乗った青函連絡船津軽丸が7月14日午前2時頃北海道渡島国上磯郡知内村狐越(こえつ)岬付近で、敵潜水艦の攻撃で沈没した。船が傾いて同乗していた指導助手3人も海にすべり落ち、板切につかまった石川悦子・荻窪(松野)久良子両助手が「斎藤先生」と呼ぶと「おーい」と返事が2回あったという。しかし結局1人の助手は本州に流れ着き、1人は海上警備隊に救助された。だが1人の助手と本人とは結局生還しなかった。札幌鉄道局長岡田五郎から死亡報告があり、8月17日除籍手続きが取られた。

間もなく終戦、悔恨の戦後10年昭和30年(1955)11月25日遭難死十周年忌に当たり国鉄関係者や教え子の募金により建てられた長田平次製作胸像の除幕式が、青函船舶鉄道管理局によって行われた。

附言すると国鉄体操の後継指導者は、平鹿郡の醍醐出身で秋田師範を卒え増田小学校訓導から上京東海大学体育学部教授森田徳之助、大館町出身秋田師範卒業後上京ニルス・ブック体操高等学校東洋分校2期生の学習院大学教授菅原鎌三郎など秋田県出身者であった。森田は昭和7年(1932)にニルス・ブック体操高等学校を卒業しており、菅原は昭和42年デンマークのオレロップ体操学校に留学している。正に斎藤の道を秋田の後輩が継いで発展させたのである。このような伝統があればこそオリンピックの大選手小野や遠藤が生まれたのかも知れない。